

国内経済情勢

概観

秋需の盛り上がりが見られず、加えて輸出の先細り懸念などもあって荷余り感が高まっており、生産調整が一段と進展しているほか雇用調整の動きも広がっている。このため製品在庫の増勢はひところと比べかなり鈍化している。こうしたなかで、機械受注は増勢が続いており、基礎資材関連業種の設備投資には根強さがうかがわれる。

商品市況は、一部商品を除き概して軟調を維持しているが、10月の消費者物価は、米価、公共料金の引上げなどから急騰した。

金融面では、銀行券の増勢鈍化が目だっている。また年末を控え企業の借入れ需要は増勢を高めている反面、金融機関の貸出態度は引き続き厳しく、企業の資金繰りひっ迫感は一段と強まっている。

9月の国際収支は、貿易収支の黒字が増加したほか、長期資本収支および短期資本収支がいずれも流入超となったため、総合収支で1年7ヵ月ぶりに黒字となった。

生産・雇用調整一段と進展

鉱工業生産(季節調整済み)は、8月前月比-3.5%の著減のあと、9月(速報)も同-0.2%の微減となった。自動車、石油は増産となったが、電気機械、紙・パルプ、繊維等で減産が強化され、鉄鋼でも高炉の定期修理もあって生産が低下した。

9月の鉱工業出荷(季節調整済み、速報)は、前月比-2.0%と減少したが、フレの大きい船舶を除いてみると同+0.5%の微増である。財別にみると、夏休みの反動や流通在庫調整一巡を映じた自動車の出荷増を主因に耐久消費財等がかなりの増加となったほか、非耐久消費財も減勢一服を示した。この間、建設資材は輸出の落込みなどから大幅減となり、また生産財も関連需要業界の減産継続による需要減退から減勢を強めた。

9月の鉱工業生産者製品在庫(季節調整済み、速報)は、前月比+1.9%とさらに増加し、生産者製品在庫率指数(同)は131.3と前月に引き続き上昇した。しかし多くの業種で生産調整が一段と進展しているため、製品在庫の増勢は鈍化傾向が続いている。

設備投資関連指標の動きをみると、9月の一般資本財出荷(季節調整済み、速報)は前月比+0.3%の微増となった。先行指標である機械受注(船舶を除く民需、季節調整済み)も9月は電力からの受注増を主因に同+6.6%と増加した(7~9月の前期比+21.1%)。10~12月についても引き続き+29.7%の増加が見込まれており、鉄鋼、化学等基礎資材関連業種の設備投資には根強いものがうかがわれる。また、9月の建設工事受注額民間産業分(季節調整済み、速報)も、前月比+9.3%と増加した。

9月の全国百貨店売上高(季節調整済み)は、前月比+5.5%(前月同+2.2%)の増加となった(前年同月比では+22.0%)。また、10月の乗用車(軽自

動車を除く)新車登録台数も、前年同月比 -5.7% (前月同 -8.9%)と落ち込み幅がさらに縮小した。

9月の労働関連指標をみると、有効求人倍率(季節調整済み)は、1.04(前月1.11)と引き続き低下し、労働力需給はひとところに比べかなり緩和してきている。これは、減産強化を背景にほぼ全業種にわたって求人手控えの動きが強まっているほか、繊維、弱電を中心に雇用調整(希望退職者募集、一時帰休等)の動きが広がりを見せ、求職者数もこのところ増加傾向を示しているためである。また名目賃金は、所定外労働時間削減の影響もあって、前年同月比 $+27.1\%$ と前月(同 $+30.7\%$)に比べやや伸び率が低下した(実質賃金の前年同月比 $+27\%$)。

消費者物価は急騰

10月の商品市況をみると、不況カルテル申請決定をはやした綿糸を中心に天然糸(そ毛糸、生糸)が反騰し、砂糖も海外高から続伸したが、鉄鋼が全品種にわたり急落したほか、木材、非鉄(銅、亜鉛)、紙、合繊も続落するなど概して軟調を維持した。これは、秋需の盛り上がりが見られず、輸出の先細り懸念もあって荷余り感や先安感が強まったうえ、資金繰りひっ迫感の強まりもあって需要業界の在庫調整意欲が一段と高まり、流通段階の需要も依然落ち込んでいるためである。こうした事情を背景に換金売りの動き(鉄鋼、紙、外材等)も広がっている。

卸売物価は、9月に前月比 $+0.1\%$ の小幅上昇にとどまったあと、10月は、鉄鋼、非鉄金属等が下落したものの、食料品(米、精製糖等)、石油製品等が上昇したため、同 $+0.5\%$ (前年同月比 $+28.7\%$)の上昇となった。

10月の消費者物価(東京、速報)は、米価の大幅

引上げや国鉄運賃等公共料金の引上げから前月比 $+2.5\%$ (前年同月比 $+25.8\%$)の大幅上昇、季節商品を除く総合で同 $+3.6\%$ (同 $+25.0\%$)の急騰を示した。

銀行券の増勢は鈍化

10月の金融市場をみると、銀行券は前年(発行超444億円)とは様変わりになり、1,519億円の還収超となり、さらに財政資金も米代金支払や金融公庫融資増を中心に3,103億円の払超(前年同1,105億円)となったため、月中3,889億円の資金余剰(前年同400億円)となり、日本銀行は買入手形の期日落ち等でこれを吸収した。

この間コール市場では、コール・レートが10月1日に 0.5% 低下したあと、都市銀行筋の取入れ需要が引き続き強かったため、通月引き締めぎみに推移した(無条件物出し手レート 12.5%)。また手形売買市場でも、年末の大幅資金不足を見越して都市銀行筋の売り意欲が強かったため、10月5日に年越期日物レートは 0.5% 上昇した(手形買い手レート年越物 13.75% 、その他 13.25% 、なお11月1日には年越期日物レートに一本化)。

10月の銀行券平均発行高の前年同月比は $+18.6\%$ と47年8月以来の低い伸びとなり、このところ増勢鈍化傾向が目だっている。これは生産調整等の進展から給与・賃金支払が伸び悩んでいることや個人消費の盛り上がりが見られないことなどが影響しているものとみられる。9月の広義マネー・サプライ(定期性預金を含む)は、前年同月比 $+10.6\%$ と前月(同 $+11.2\%$)に比べ伸び率が鈍化した。

9月の全国銀行貸出は、月中7,484億円の増加(前年同10,565億円)にとどまり、月末残高の前年比伸び率は $+11.7\%$ (前月同 $+12.4\%$)に低下した。

中小企業金融機関貸出も引き続き増勢鈍化を示しているが、政府系中小3機関の貸出は融資枠追加を映じて相対的に高い伸びを続けている。

この間、企業の資金調達態度は当面11月から12月にかけて決算・賞与資金等の需要増大が見込まれるため、このところ一段と真剣みを加えている。しかし金融機関側は、地方公共団体等からの借入れ需要の増大もあって引き続き貸出を厳しく抑制しているので、企業の資金繰りひっ迫感是一段と強まっている。

10月の公社債市況は、買い手筋の目先相場観による小口買いもあって総じて強保合いで推移した。一方株式市況は、ニューヨーク株価の安値更新もあって10月9日、昨年来の安値(旧ダウ3,355円)に落ち込んだあと、一進一退の動きを示したが、月末から11月初にかけて反発した。

9月の総合収支は久方ぶりに黒字

9月の国際収支は、総合収支で128百万ドルの黒字となり、48年2月以来1年7ヵ月ぶりに黒字となった(前月513百万ドルの赤字)。これは、輸入の減少が響いて貿易収支の黒字が増加したほか、長期資本収支もオイル・マネーの流入などから流入超(46年5月以来)となり、また短期資本収支も貿易信用の享受増から流入超となったためである。もっとも、9月の貿易収支を季節調整後で見ると、輸入が減少を示したものの、輸出も減少したところから、黒字幅は230百万ドルと前月(同543百万ドル)に比べ縮小した。

9月の輸出(通関ベース、季節調整済み)は、前月比-4.8%と減少した(前年同月比では+43.2

%)。輸出価格は、鉄鋼、化学肥料等が引き続き上昇しているものの、繊維品が一段と軟化したことを主因に総じてみれば若干下落した。また輸出数量も、船舶引渡し繰延べなど一時的要因のほか、アメリカ、東南アジア向けを中心とする繊維の停滞、米国向け自動車的大幅減などから、前月比かなりの減少となった。地域別には、中近東向けが高水準を維持し、西欧向けも持ち直した反面、東南アジア向けが一段と不振であり、米国向けも伸び悩みが目だった。

10月の輸出信用状接受高(季節調整済み、前月比)は、前月大幅落込み(-13.7%)のあと、+8.6%と再び増加した。

9月の輸入(通関ベース、季節調整済み)は、輸入数量減を主因に前月比-3.9%と前月(同-8.6%)に引き続き減少した(前年同月比では+45.0%)。輸入価格は、原油、鉄鋼原材料、砂糖等が騰勢を維持したところから、小幅ながら上昇した。一方輸入数量は、原油、繊維原料、非鉄金属鉱等を中心に前月に引き続きかなりの減少となった。

10月のインターバンク米ドル直物中心相場は、中旬以降若干軟化する場面もみられたが、総じてみれば強含みに推移した(10月末299円85銭、前月末298円50銭)。

10月の外貨準備高は、前月に引き続き月中282百万ドル増加し、月末残高は13,451百万ドルとなった。

(昭和49年11月12日)